

京都大学	博士(文学)	氏名	浅 沼 光 樹
論文題目	非有の思惟 ― シェリング哲学の本質と生成 ―		
(論文内容の要旨) 序章 生成における一 本研究は、第一にシェリングの哲学の本質の解明を目的とする。しかし、シェリングにおいては《思惟の本質の解明》と《思惟の生成の解明》は分離しえない。なぜならば、たんにシェリングの思惟の本質はその生成を通して初めて露わになるというだけでなく、むしろシェリングの思惟それ自体が生成をいわば本質としていると思われるからである。その限りにおいて、本研究は第二に上で述べた二重の課題、つまりシェリング哲学の本質と生成の解明を不即不離のものとして、一体的に扱おうとする。とはいえ、これは畢竟、シェリングにおける思惟の生成という事実をおよそ考えられうる限り最高度に積極的に捉えようとすることにほかならない。これはシェリングの思惟において「生成における一」を問うこととして遂行され、さらにこの問いはシェリングにおける哲学的直観への問いとして具体化される。しかし最後に第三に、このような意味におけるシェリング哲学の《本質＝生成》の解明に際して本研究は、探求の導きの糸として「非有（メー・オン）」のイメージを用いる。 第一章 無制約者と知的直観 ― 『註解』から『自我論』へ 論文「思弁的観念論の道」でD・ヘンリッヒは『ティマイオス註解』に言及し、自身の解釈を披瀝した。彼によると、シェリングの意図はプラトンが世界の起源と永遠のアイデアとに関する語りという装いのもとでカントの超越論的観念論の構想を展開していることを示すことにあった。この同一視によってカントのカテゴリー論へプラトンの構造が持ち込まれ、このずれが『形式論』では明白な原理へと高められる。ゆえに『註解』は『形式論』と内容的連関を有する。1994年に出版された『ティマイオス註解』には「生成と物質」と題するH・クリングスの論文が併録される。彼の解釈の基調は、これを後年のシェリングの自然哲学、特にその物質概念の先駆とみなすことにあった。クリングスの主張はヘンリッヒの解釈に対するアンチ・テーゼである。ところがM・フランツはクリングスを批判した。フランツによると、クリングスのようにテキストを全体として自然哲学的に解釈することは一面的で不適切である。というのも、この解釈はテキストのもう一つの主要関心を看過しているからである。しかしフランツは『註解』における二つの主題の連関を説明していない。この連関を説明することが本章の課題である。まず第一に、両者の解釈にとって等しく十分な議論が『註解』には見出されうるが、クリングスの解釈には決定的な難点があることが示される。			

第二に、クリングスの解釈を自然哲学との直接的関係から解放し、改めて『自我論』へと、特にその中心思想である「無制約者」と「知的直観」へと関係付けることによって、クリングスの解釈の改造が試みられる。『註解』と『自我論』の関係を明らかにすることによって、二つの『註解』解釈の見かけ上の対立は止揚され、シェリングの初期哲学に対する新しい視圏が切り開かれる。

第二章 シェリング哲学の出発点 — 人間的理性の起源と歴史の構成

シェリングのマギスター論文『悪の起源』が彼の哲学的思索の出発点として解釈される。従来、この論文はこうした観点から捉えられてこなかったし、ごく最近に至るまで忘却されていた。そうした事態が生じた原因の一つとして、この論文が聖書解釈という体裁をとっている点を指摘しうる。この論文が聖書解釈学的性格をもつというのはまちがいはないが、それは哲学的側面をも有している。というのも、それは創世記の第三章を解釈の対象としてはいるが、同時にこの創世記第三章は、人間的理性の自己省察にかんする最古の記録とも見なされており、人間的理性はこうした自己省察によっておのれの本性を探求し、その自己省察に基づいて「比較的な意味でア・プリオリに」自己の歴史を構成すると考えられているからである。しかしこの論文の実質が、今述べた意味における理性の自己省察と歴史の構成に他ならないとすると、1792年の『悪の起源』と一般にシェリングの最初の哲学的著作と見なされている1794年の『哲学一般の形式の可能性』との間には断絶は存在しない。というのも、こうした意味における理性の自己省察と歴史の構成という主題は『哲学一般の形式の可能性』にとってその重要な背景をなしているからである。

第三章 歴史的理性の生成 — シェリング『悪の起源』における神話解釈の意義

『悪の起源』の最終章は歴史的理性、生成発展する理性という構想を提示する。これをふまえてこれに先立つ章をも同時に視野に入れるとき、最終章へと至る道程は理性そのものが自らを歴史的なものとして認識するプロセスとして解釈できる。理性がこうした自己認識に達するのは一種の自己省察を通してであるが、『悪の起源』ではこの自己省察が神話の解釈という形態において遂行されている。しかし哲学的思考にとって「神話を解釈する」とはいかなることか。神話が理性的ないしは哲学的思考の母体であるのはまちがいない。ところが哲学的思考は「哲学的」になるためには神話的思考を克服しなければならなかった。したがって「神話を解釈する」とは哲学的思考にとっては、すでに克服済みの過去を自身のうちに再発見し、それを自らに統合することではなければならない。だが、理性はこの行為を通して自分自身を歴史的であると認識するのだから、この理性はそれ自体が注目すべき特質を備えていることになる。この理性は、自らの神話時代を自己の根底として自身に統合しているのである。こうした作用のうちにシェリング的思惟の本質が現れている。つまり、これと同一の思惟の運動が彼の自然哲学の理念の根底にも存している。シェリングの自然哲学の根本理念は自然を自我の根底として、自我の「超越論的過去」として構成する、というものだ

からである。ここでは、哲学的思考と神話的思考の間にみられたのと同じの関係が、自我と自然とのあいだで反復されている。

第四章 神の内なる自然 — シェリング哲学の第二の端緒として

シェリングの『自由論』はそれ以前の彼の思考といかなる関係にあるのか。シェリング自身は『自由論』を『叙述』の継続であると主張するが、この主張は真剣に受け止められてこなかった。『自由論』の探求全体は神の内的二元性という構想を前提としているが、この構想と『叙述』における絶対者理解は相容れないように見えるからである。しかし『叙述』から『自由論』へと至るシェリングの思惟の道は同一の体系の叙述の継続として解釈されねばならない。ただし同一の体系の叙述が進行する過程は、絶対的理性が自己自身について経験を積む過程と解される。その場合同一の体系の叙述と絶対的理性の自己認識の深まりとは矛盾しない。さらに、絶対的理性の自己認識の変化が根本的なものであるならば、その変化は体系自体の根本構造の変化を伴わざるをえないだろう。さてヘーゲルはシェリングの絶対者の理念に共鳴し、自らの哲学をシェリングの自然哲学と同一哲学の必然的帰結であると宣言している。したがって次の問いが不可避な問いとして湧き上がらざるをえない。すなわち、その最初の叙述からすれば当然そこへと至りつくはずであった地点へとシェリング哲学をもたらしたのは、シェリングの『自由論』とヘーゲルの『精神の現象学』のいずれか、という問いである。

第五章『自由論』の立場 — 『ティマイオス』評価の観点から

クリングスによる『ティマイオス註解』解釈の主旨は、これを後年のシェリングの自然哲学の先駆とみなすことにあった。しかし彼はさらに「『ブルーノ』においてシェリングはこの《プラトン》と距離をとる。『哲学と宗教』においては『ティマイオス』の質料概念との決別がなされる」と述べている。確かに『哲学と宗教』においてシェリングはプラトンが『ティマイオス』の作者であることを否定している。しかしこれは『ティマイオス』の質料概念との決別を意味しない。むしろ『ティマイオス』の質料概念に対する積極的關係は、シェリングの同一哲学期の全体を通して維持されており、プラトンが『ティマイオス』の作者であることをシェリングが疑う場合でも、この懷疑自体がこの積極的關係の上に成り立っている。

補論一 もう一つのエコソフィを求めて — シェリングの自然哲学とディープ・エコロジー

ディープ・エコロジー運動の全体構造は(1)究極的前提、(2)プラットフォーム原則、(3)より一般的な指針、(4)具体的決定からなり、第二レベルにおける一致のみが要求され、第一レベルの多様性も容認されるが、ただしそこからプラットフォーム原則が導出可能でなければならない。シェリングの思想は、「思惟するものの捨象」を要請する「客観的観念論」という面を有するがゆえに、その条件を満たしている。そこ

で、一方で各レベルの関係は〈論理的〉であればよいこと、他方で『超越論的観念論の体系』におけるシェリングの思想を考慮に入れた上で、後者を第一レベルに位置づけ、他方に現代の環境芸術家の活動を配し、両者をプラットフォーム原則を介して接続させることで、シェリングの自然哲学のアクチュアリティの一端を浮かび上がる。

補論二 シェリングにおける神と自然過程

シェリングは自然哲学（自然過程の叙述）を体系の一部として初期から晩年に至るまで保持し続けた。この自然哲学はその根拠を自己のうちにではなく、神の存在のうちにもつものであるが、シェリングの神論が十全な形で展開されるには、彼の哲学の最終局面（積極哲学）を待たねばならない。本章は、積極哲学の創造論を自然哲学の最終的基礎付けと見なし、創造の過程という（自然哲学の内部にとどまる限り隠されている）自然哲学の相貌を明るみにもたす。

(論文審査の結果の要旨)

本論文はドイツ観念論の哲学者シェリング(1775-1854)の研究に新機軸をもたらそうとするものである。ながらくシェリングはヘーゲルが構築した哲学史観の内に織り込まれてヘーゲルの影に覆われてきた。ここで現れるシェリングは早熟の天才ではあるが著作ごとに変貌を続け確たる立場を持たぬまま中年以降は長い沈黙に入り、基本的には1809年の著作『人間的自由の本質』(以下『自由論』と略称)で役割を終えてしまった哲学者である。これに反して1955年にヴァルター・シュルツの研究『シェリング後期哲学におけるドイツ観念論の完成』が登場して後期シェリングの哲学史的意義を強調する認識が学界に定着したが、初期のシェリングに対する評価そのものには依然として大きな違いは生じなかった。ところが近年シェリングの経歴の初期に属する草稿類が続々と公刊されるにつれ、シェリング像は劇的な変貌を見せ始めている。従来最初の公刊論文とされていたものより時期的にさらに遡る草稿群に基づき在来のシェリング観に修正を迫るエアハルト、フランツ、ザントカウレンなどの研究がドイツにおいて次々と現れるに至っているのである。本論文の第一の意義はこのような最新の研究状況を十分に踏まえたうえの成果である点にある。しかしながら第二に、論者の主張はそれにとどまらず、表題および副題に明示されているように新資料群の読みをシェリング哲学の本質についての理解の刷新へと還元するという野心的な観点を有することに特色を持っている。のみならず第三に、そのようにして得られたシェリング像に基づいて哲学史の新しい見方の可能性を提起していること、これが本論文において注目されるべき点である。

本論文は序章と5つの章および付論2編からなっている。

序章「生成における一」は論者のシェリング観とアプローチを端的に述べている。それによればシェリングに対してヘーゲル流の哲学史が「内的一貫性を欠く非体系的な哲学者」というような性格付けしかおこない得なかったのは、そもそもがシェリングの思惟の根本的な性格である「生成における一」すなわち、「シェリングの思惟の本質はその生成を通して初めて露わになるというだけではなく、むしろシェリングの思惟それ自体が生成をいわば本質としている」ということを捉えられなかったためであるとされる。このようなユニークな哲学者としてのシェリングを的確に把握するために論者は西谷啓治の洞察に学んでベルクソンの哲学的直観の説を背景として取り入れ、「非有(メー・オン)」のイメージこそが変転の中に現れるシェリングの全体像、つまり「生成における一」をとらえるための探求の導きとして用いられるべきであることを論じている。

第一章「無制約者と知的直観 —『注解』から『自我論』へ」は本論文の中核と目すべきものであり、1994年になって初めて日の目を見たシェリングの草稿『ティマイオス注解』(1794年成立)をめぐるディーター・ヘンリッヒとヘルマン・クリングスという大家の間に生じた対立の中に分け入り、両者を共に批判して独自の解釈を提出し

ている。ヘンリッヒによればシェリングの意図はプラトンが世界の起源と永遠のアイデアとに関する語りという装いのもとでカントの超越論的観念論の構想を展開していることを示すことなのであるが、クリングスの解釈はシェリングは後年の自然哲学につながる物質概念の先駆的形態をここで提出しているというものである。これに対して論者は両者それぞれの限界と難点を指摘しつつ『ティマイオス注解』は1795年の「哲学の原理としての自我」へと関連付けて解釈されねばならず、特にその「無制約者」と「知的直観」こそが『ティマイオス注解』においてプラトン解釈のもとでシェリングが探求していた当のものであると主張する。無制約者も知的直観もカントに源を発する概念であり、論者によれば結局シェリングの哲学的発足はカントとプラトンとの関連付けだったことが確認されねばならない。さらには1797年の著作「最近の哲学的文献に対する一般的概観」を参照することによって「同じ一つの超越論哲学が『ティマイオス』から『エティカ』を経て『純粹理性批判』へと発展する」というのがシェリングの抱懷した哲学史像である、という斬新な主張が本章では行われている。カントがあとに残した問題、とりわけ物自体にかかわる諸問題をさらに追及するためにシェリングはプラトンに手掛かりを求めたのであって、このことが哲学者としてのシェリングの歩みを決定した、と論者は考えており、論者が「非有（メー・オン）」という言葉に託したモチーフもここに原点を持っている。

第2章「シェリング哲学の出発点 — 人間的理性の起源と歴史の構成」は第1章で論じられたシェリングの哲学的出発を踏まえてさらに1792年のマギステル論文『創世記第3章における人間的悪の起源』（以下『悪の起源』と略称）へと遡ってそれを確認する作業にあてられている。聖書解釈をテーマとしたこの論文に哲学的内容を読み取るのも論者の主張の重要な構成要素であって、創世記第3章すなわち楽園追放の物語は人間理性の自己省察に関する最古の記録として、そこには「比較的な意味でアприオリに」歴史を構成する理性が描き出されていることをシェリングに即して論者は確認している。このことによってこの論文は従来されていたようにカントの「人類史の憶測的起源」とだけではなく、シェリングの『哲学一般の形式の可能性』（1794年）と密接につながっていることが明示される。すなわち論者はここでも従来シェリングの最初の著作と目されてきたものに先行してすでにシェリングの哲学的思惟は開始されていたことを明らかにしたのである。

第3章「歴史的理性の生成 — シェリング『悪の起源』における神話解釈の意義」は第2章でその哲学的な意義が強調された『悪の起源』に即し、哲学的思惟にとって「神話を解釈する」ということがいかなることなのか検討する。あえて神話にかかわった、ということがシェリングにとっては偶然ではなくいわばその後のシェリングを理解せしめる枢要な事実であることを明らかにするのが本章の狙いである。すなわち、神話を解釈することとは哲学的思考にとってすでに克服済みの過去を自己の内に発見し、それを自己に統合することである。言いかえると、理性は自己の神話時代を自己の根

底に持つことになる。この発想はシェリング的思惟の本質に属すると論者は論ずる。なぜならば、同一の方法が自然哲学にも現れているからである。シェリング自然哲学において自然は自我の根底として、自我の「超越論的過去」である、という性格を与えられるからである。自然哲学と聖書解釈という違いを超えてシェリングの方法は一貫している。

第4章「神の内なる自然 — シェリング哲学の第二の端緒として」は、上述のような新しい背景のもとにおくとき従来からシェリング哲学のピークとみられてきている『自由論』がどのような姿を現すのか、ということの研究である。この問題を論者はシェリング自身の言うように『自由論』は『私の哲学体系の叙述』の継続として理解すべきであるということの論証を通じて果たしている。

第5章「『自由論』の立場 — 『ティマイオス』評価の観点から」は第1章で取り上げられた『ティマイオス』解釈と『自由論』との関係を取り上げ、『自由論』の「神の内なる自然」を『ティマイオス』の質料概念と連関させ、『自由論』の質料概念の確立が『自由論』そのものの立場の成立と一体的であるという主張として結晶させている。こうしてシェリング的思惟の「生成における一」である所以を論者は確認している。

補論2編はそれぞれ「もう一つのエコソフィーを求めて — シェリングの自然哲学とディープ・エコロジー」および「シェリングにおける神と自然過程」と題されており、前者は現代のディープ・エコロジー運動とシェリング自然哲学の接点を求め、後者は本論では扱われていないシェリング後期のいわゆる積極哲学がその創造論において自然哲学の最終的基礎づけにほかならないことを明らかにしている。

以上のように、本論文は論者の長年にわたるシェリング研究の集大成として国内外に対して研究史上の位置を十分に主張できるものである。特にいわばはじめにすでに全体が現れているというシェリング像は未曾有のものであり、あまりにも長くヘーゲルに由来する哲学史的図式のうちに呻吟してきたシェリングに対して本来ヘーゲルとはまったく違った哲学的思惟の在り方の体现者としてのシェリングを描き出し、さらにベルクソンを援用してそのような哲学者を研究する上での方法の開発をも併せ考えたという点に本論文の意義が存することは明らかである。しかしながらこの課題はきわめて大きなものであり本論文はこれらの課題、特に後者の面に関してはやや見通しが先行しており、いまだ十分に説得的なものではないことも指摘されねばならないだろう。これは論者の今後の精進に期待されるべきことである。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成25年2月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。